

道徳教育における「礼儀」とその課題 ①

どうとくのひろば No. 09 中部学院大学 准教授 柴崎直人

1 子どもに身につけさせたいもの

(略) 以上のように、多くの保護者が「学力・学ぶ意欲」と同様に「思いやり」「マナーやルール」といった礼儀作法に関する資質を身につけ、またその教育を学校に期待している現状がうかがえる。このような資質を学校で育てるために、教育課程ではどのようなしかけがなされているのだろうか。

礼儀作法については、学校の多くが児童会・生徒会・学級活動等を基盤とした校内でのあいさつ運動やマナー向上活動、またクラブ活動・部活動や日常の学校生活での対人関係を通じて体験を重ね、思考と試行錯誤を積み上げて習得されるような形を採用していることだろう。

そのような形での学びは、具体的な場面における適正な行動を考えさせる指導であり、特別活動や生徒指導の領域にカテゴライズされるものである。もちろんこの形態の学びも大切であり、教育において不可欠な営みだが、それだけではただの「マナーのやりかた」「作法の手続き」といった外面的なスキルを身につけるにとどまる。

それだけではなく、内面的な資質としての道徳的実践力の育成があつてはじめて、「礼儀正しさを学んだ」ということになる。そのための一連のしかけの中心に配置されるものが、道徳教育における「礼儀」(主として他の人とのかかわりに関すること)に関する項目である。

2 教育と礼儀

道徳教育において礼儀との関係はいかにあるのだろうか。日本の教育における礼儀作法の在り方については、たとえば中央教育審議会の答申「新しい時代における教養教育の在り方について」(中央教育審議会 2002)に次のように示されている。

「教養を形成する上で、礼儀・作法をはじめとして型から入ることによって、身体感覚として身に付けられる『修養的教養』は重要な意義を持っている。このためにも、私たちの思考や行動の規範となり、教養の基盤を形成している我が国の生活文化や伝統文化の価値を改めて見直す必要がある。」 幼・少年期の教養・教育の課題としては、「伝統的な生活習慣などの『生活文化のかたち』を子どもたちにしっかりと伝え、あいさつやマナー、善悪の判断基準、基本的な社会道徳等を身に付けさせるとともに、美を感じる心や自然に対する畏敬の念、豊かな情緒、宗教に対する理解などをはぐくんでいく必要がある。」

としており、礼儀・作法は「修養的教養」であるとして、型から入るもの、また身体感覚として身につけるような「伝統的な生活習慣」として、その位置を与えている。(略) また、学校教育における礼儀の指導については、次のように解説されている。

「指導に当たっては、日常生活において、時と場に応じた適切な言動を体験的に学習するとともに、形の根底に流れるその意義を深く理解できるようにすることが大切である。また、逆に、心情面を整えることによって形として外に表すことができるようになることもある。このことを十分に踏まえて、時と場に応じた適切な言葉遣いや行動がとれるよう、特に内面的な指導を重視する必要がある(中学校学習指導要領解説 道徳編 2008 文部科学省)」

つまり、礼儀は心と形の双方から構築するものであるが、まずは形を整えて、その上で意義や心情を深く修めるものととらえられている。その意味でも特に特別活動との関係はきわめて重要といえよう。なぜならば道徳の時間に培った資質を、特別活動において「なすことによって」学び、深めるからである。なかでもクラブ活動や学校行事において、礼儀に関する学びの機会は質量共に他の活動を凌ぐ。よってそれらの指導に際しては道徳教育との連携と、礼儀そのものの学びへの留意が強く求められる。

道徳教育における「礼儀」とその課題 ②

どうとくのひろば No. 09 中部学院大学 准教授 柴崎直人

3 礼儀作法を理解する

礼儀の適切な指導を行うに際しては、礼儀作法に対する理解と関連知識の習得が不可欠である。

「礼」とは人間に備わるあたたかい真心を具体的に表にあらわしたものをいい、「礼儀」とは他との関係においてそれを判断し、評価し、また行為を行う際の基準となる原則のことをいう。このように礼儀は価値基準を内包した判断・評価のことであるが、それを基盤として社会的に様式化した言語的・非言語的な表現が「作法」である。これらの語を組み合わせた「礼儀作法」という言葉は、主として社会における多様な集団の秩序や、個人における人間関係を構築し、維持し、発展させるための価値基準および行動様式の意味で用いられている。

礼儀作法について、元相模女子大学教授の小笠原忠統（小笠原流礼法三十二世宗家）は次のように定義している。「礼儀作法とは、時と所と場合によって自己の衝動や情感を制御する機能であり、“しきたり”や“きまり”、身体の起居動作はそれを体現するための方式である。ここでは自己の情感（憎悪であれ愛情であれ）と、“しきたり”や“きまり”は、相互に補い合って矛盾することがない。われわれの先祖はこの自己抑制機能に、美的な基準、道徳的な基準を付け加え、“文化”という概念の一翼を担うまでに礼儀作法を引き上げたのである」（小笠原忠統1989『小笠原流礼法入門』中央文芸社）。

人類は文明を持ち、社会生活を営むようになってから、さまざまな対象と関係を持つ必要に迫られた。その対象とは何か。それは人間のみならず、身近にある器物や動植物、組織、制度、雰囲気、環境などといった目に見えるものや見えないもの、さらに神や仏といった存在の有無すら確認できないものまでが、人間と関係する「対象」である。そしてそれらとの望ましい関係を構築することを価値あるものととらえて、これを子孫や後輩、教え子に伝えようと、世界のあらゆる文明において、それぞれの地方や文化圏のやり方で体系化され、伝えられている。それらが英語圏ではmannersやetiquette、フランス語圏ではsavoir-vivre、日本語では礼儀作法などと呼ばれていることになる。本稿では便宜的にこれらを総称して「礼儀」と呼ぶことにする。

4 敬意の重要性

あらゆる対象と自分との関係をよいものに保つものはなんだろうか。それは「敬意」である。あるものを大事に思う気持ちであり、大事にしたいという気持ちでもある。敬意を育てることこそが「礼儀」の学びであり、「礼儀正しさ」という道徳的価値を自覚し、それを深めることを通して心を豊かに育て、それに伴って自ずから行動が望ましいものに変容することを願う営みが、道徳の時間における「礼儀」の学びの本質なのである。道徳の時間に礼儀を学ぶことによって、敬意を根底に置いた礼儀正しさが、人間として生きていく上において必要不可欠なものであり、それが人間が人間であること、誇りであること、と心から思えるような人間が育つことが期待されている。

存在を大事に思っている。かけがえのない大切なものとして関わりたいと思っている。その「敬意」をあらゆる手段を使って対象に示そうとしたのが礼儀である。よって礼儀正しい人とは、言語的・非言語的なあらゆる表現行動に「敬意」が含まれる人をさす。形だけでは不備とされる。

敬意を示す第一歩は何か。それは相手が嫌に思うような所業を避けることである。いわゆる「己の欲せざる所、人に施すことなかれ」である。すると人間教育の嚆矢としての家庭教育では、他人からされて最も嫌なことから教え始めなくてはならないことがわかる。それは何かといえば、「自分の存在を認めてもらえないこと」であり、その最たるものが「無視」である。無視は「オマエはいないよ」とあしらわれることにほかならない。つまり、礼儀の第一歩目は「相手を無視しない、いないことにしない」ことであり、敬意を示すことはすなわち、人をないがしろにしないことなのである。

道徳教育における「礼儀」とその課題 ③

どうとくのひろば No. 09 中部学院大学 准教授 柴崎直人

5 あいさつの功罪

ないがしろにしていないよ、無視していないよ、大事に思っているよ、という敬意を伝える最も簡単で効果的な方法は、「あいさつ」である。よって教育においてはあいさつを徹底する必要がある。家庭では朝起きて顔を合わせたときに「おはようございます」。帰宅時に「ただいま」。就寝前に「おやすみなさい」。これらを保護者から率先垂範することが家庭教育の原点となる。学校においても同様である。これは一見すると形式を教えているように見えるだろうが、ないがしろにしない、という道徳的心情をもとに場面に応じて道徳的判断を下したうえでの道徳的实践にほかならない。このときに相手の心に生ずる「大切にされている」「うれしい」「心地よい」という感覚は、道徳的实践意欲と態度に直結するものである。

これらの内面的資質によって、将来出会うであろうさまざまな場面、状況においても、道徳的価値を実現するために適切な行為を主体的に選択し、実践することができるようになる。すなわち道徳的实践力を養うことができるということになる。(略)

筆者が小学校1～6年生の道徳の副読本(10種(9社):60冊:2080資料)の「2-(1)礼儀」として示された100本の資料を調べたところ、100の副読本資料の内容は、そのほとんどがあいさつ、気持ちのよい態度の素晴らしさ、資料から読み取れる登場人物の気持ちの解釈と自身への置き換えが中心であり、「礼儀」という道徳的価値が日常生活の場面で現実的にどのような形で展開されているかという「具体性」「現実性」「多様性」が著しく不足していた。また、礼儀それ自体を対象とする日本の伝統文化である「礼法」を取り上げた資料や解説は皆無であった。日常のあらゆる営みを礼儀の対象に据える「礼法」の視点の欠如は、副読本資料の「日常生活における礼儀場面の極端な狭さ・少なさ」と強く関連すると考えられる。(略)

あいさつからの学びはきわめて大切ではあるのだが、小学校の何年生になっても「あいさつが大事」、中学生になっても「あいさつすると気持ちがよい」、とこればかり聞かされる子どもはたまったものではないだろう。「またあいさつか、はいはい、あいさつすると気持ちいい!って言えばいいんでしょう」という反応を招くおそれがある。

6 教員が留意すべきもの

学校教員は、このような状況下で学校教育において礼儀の教えを担い、保護者をはじめとする人々の礼儀教育へのニーズにこたえなくてはならない。そのためには、まず礼儀とは何かを理解すること、そのうえで日常においてはどのような「礼儀」が営まれているのかを知らなくてはならない。

「江戸しぐさ」は礼儀の格好の教材ではあるが、では現代日本ではどのような礼儀があるのか、それを自身の経験と自身の言葉で子どもに伝えられなければならない。

そのためには、自身が学生として生活しているうちに、さまざまな礼儀場面をとくに意識して体験して、それを積み重ねることによって経験という形で引き出しに入れていつでも引き出せるようにしておくことが必要であろう。これについては大学の「道徳」「特別活動」の講義で少し齧る程度では不足である。その重要性を鑑みて、「教職礼法」の講義を設置すべきであろう。ここで教員として必要なマナー・エチケット・礼儀作法の原理・知識・スキルを学ぶのである。それにより道徳教育と特別活動の連携や、「先生は世間知らず」と言われることがなくなる社会的マナーを習得することが可能になるだろう。ちなみに世間の皆さまの言う「世間知らず」とは、「私が所属する業界の商習慣やビジネスマナーを、先生なのに知らない」とほぼ同義である。

またあわせて道徳副読本においても、「礼儀＝あいさつ」という固定観念の払拭と、日常生活での具体的な礼儀への視点、適切な内容の精選が必要であろう。礼儀に関する望ましい教育環境の構築に向けて、さまざまな立場の専門家の奮起と議論を期待するものである。